

サハ共和国・ヤクーツクだより ⑤

杉嶋俊夫

現地滞在中の文章の中ではあまり多くはタイムリーなことに触れませんでした。体験したことをいくつか時系列順に記してみたいと思います。

私が北東連邦大学に赴任した3月中旬というのは長い冬の終わりにあたり、日毎に少しずつ暖かくなっていきました。それに伴って大学内のイベントも増えていき、なかなか街には出られませんでした。3月末に民族衣装・装身具ファッション

ショーを観ることができました。サハ共和国の各地から応募者が集まり、プロのデザイナー・職人だけでなく現役の大学生・専門学校生も出品していました。サハならではのエキゾチックで美しい作品をたっぷり堪能できました。このショーは厳密には「コンテスト」で、幸運なことに翌月に、入賞者のショーも観られました。

4月中旬、ヤクーツク市内の図書館のビブリオノーチ(書物の夜)というイベントを覗きました。これはロシアの他の都市でも行われている恒例行事で、夜11時頃まで図書館を開放して、書庫案内、地元著名人の講演会、ブックリサイクル、ミニコンサートなどが開かれるのです。今回最大の目玉は漫画描画教室でした。会場となった図書館閲覧室を少年少女が埋め尽くして、腕を競い合っていました。ちなみに市内には3つの大きな漫画サークルがあります。その1つは、描き方がかなり独特(サハ風?)で、同人誌も出しています。

同じ頃、学内で知り合った女性の誘いで、彼女が働いている学科主催の大学間文化学コンテストの審査員をすることになりました。文化学とい



1

ファッションショー サハのファッションの特色は、伝統的な文様をうまくデザインに取り入れていることです。ただ、実際に街を歩いてそのようなファッションにお目にかかることはありませんでした。

うのは歴史学・芸術学・哲学などの学際的な視点で文化を研究する学問です。文化学科は学内でも比較的新しい学科で、初めての試みとしてコンテストを行ったのでした。文化学コースのある市内のほぼ全ての大学の学生が出場したのですが、まず大学の数の多さにびっくり。審査してみても学生たちのレベルの高さにまたびっくりしていました。

4月末、偶然、障害を持つ子供たちの養育施設主催の祭典を観る機会に恵まれました。その施設は日本でいう児童館に隣接しており、さらにその近所にはサーカスがあります。祭典は、児童館のサークルの子供達やサーカス団員らと日頃の施設の子供達との交流の様子とその成果を発表するという意味を持っていました。ユニークな地域コミュニティの活動を垣間見た一日でした。

5月1日はメーデー。日本ではその意味を知らない若者が増えてきましたが、ヤクーツクでは老いも若きも朝から昼過ぎまで市内を練り歩きま

す。ただ、実際は企業、大学、行政機関等の宣伝パレードに近いものかなと感じました。当日はパレードに合わせたように次第に天気がよくなって、大いに盛り上がりました。一番面白かったの

は、パレードの終点で解散すると人々が輪になってダンスを踊り始めたことでした。このダンスの話は次回以降にまた少し触れたいと思います。



2

マンガ ビブリオノーチ(書物の夜)の目玉イベントだったマンガ描画講座(コンテスト)。会場になった閲覧室の外の廊下には講座の主催者であるマンガサークルの作品が、入口には日本のマンガ単行本(英語・ロシア語版)が、展示されていました。漫画作品を大きく分類すると、日本風・アメリカ風・サハスタイルの3種類? があるようです。



4

子どもの祭典 バリ島の王を演じる障害児養育施設の男子と、王女を演じる子どもサークルの女の子。背景のスクリーンには、普段、施設の活動を紹介する映像が出し物の合間に映し出されていました。



3

文化学コンテスト 北東連邦大学の文化学科は、北方諸民族言語文化学部があり、シベリアだけでなく世界の文化を学ぶことができます。大学間コンテストでは、ある共通の課題の解決策を各グループ(各大学)で考えて発表するというゲームもありました。写真は、解決策を発表するグループの代表たち。



5

メーデー おそらくパレードで最長だったのが北東連邦大学の行列です。こちらに映っているのは、文学部の学生たち。西欧の騎士風のグループや、中国の人民服のようなものを着ているグループもありました。